

北野図書館報

編集発行

大阪府立
北野高等学校
図書館

人のため 道のため

洪庵のたいまつを繋ぐ

新型コロナウイルス感染症の流行拡大は世界中で続いており六月末までに世界の感染者は一千万人に達する見込みであるとされる。確たる治療法・予防法が確立されない中、現代の日本で、感染症がこれほど私たちに悩まし、生活を大きく変えるものとは、思いもしなかった。医学が進歩した現代でさえ、これほど人々を苦しめる。昔の人々はどうのように感染症と立ち向かい、克服、共生する術を学んできたのか。このことに関心をもち、アルベール・カミュの『ペスト』等の本を読んだ生徒諸君も多いだろう。

幕末の大坂で、人々を天然痘やコレラから救うため、緒方洪庵は立ち向かい、その治療法に画期的な業績を残した。なぜ成し遂げることができたのか。一つは、十七歳で中天游塾へ入門して以来、蘭方医学を中心に、蘭語学、数学、物理学、光学など幅広い学問を恩師から教授され、勤勉強のち獲得し、知識体系を確立したこと。

二つめは、適塾を創設し、自ら確立した素晴らしい知識体系を、自分の利益のためではなく、惜しみなく次の世代に移し続け、日本の近代医学をはじめとする諸学問のレベルを全体に高く引き上げ、各界で活躍する人材を育成したこと。

三つめは、大坂時代、医師として医学の研究に邁進すると同時に、臨床医療に精励し、英国のジェンナーが開発した牛痘苗をワクチンに使う予防法をいち早く取り入れ、正確な情報を人々に発信し、除痘事業を展開した行動力である。

四つめは、洪庵のネットワーク構築力である。大坂で除痘館が成功した要因には大坂商人の資金援助があった。特に世話方の薬種商、大和屋喜兵衛がスポンサーとして惜しみない支援をしたと言われる。洪庵は除痘館と同時に西日本を中心にワクチンを分与する分苗所を作るが、これにも大坂商人が協力した。分苗所の数は一八四九年十一月からたった五カ月で西日本を中心に六十四カ所に達した。迅速に展開することができた背景には適塾の塾生のネットワークもあつたという。

五つめに、私が最も重要な要因だと思うのは、洪庵のマインドセットである。洪庵は、門下生達によく「道のため、人のため、国のため」と言葉を贈った。道とは、門下生が選んだ、プロとしての道、そして人としての道である。自分が獲得した力を、余すところなく社会や国家のために發揮してほしい、という強い思いがこめられている。洪庵の生涯を通じたこの心の姿勢が、多くの人々からの絶大な信頼をあつめ、洪庵の事業は多くの援助を受け、成功したと思う。最後に司馬遼太郎の「洪庵のたいまつ」の一節を引用させていただく。「世のために尽くした人の一生ほど美しいものはない。ここでは特に美しい生涯を送った人について語りたい。緒方洪庵のことである。かれは、名を求めず、利を求めなかった。あふれるほどの実力がありながら、しかも他人のために生き続けた。そういう生涯は、はるかな山河のように、実に美しく思えるのである。」

人はどう行動すれば美しいか、ということを考えるのが武士たちの倫理観であり、人はどのように思考し行動すれば公益のためになるかということを考えるのが江戸時代の学問の主題だった。これらが幕末人たちのすがすがしい人物像の基盤にあり、また明治維新という世界史上ほかに類を見ない大革命を成り立たせた要因でもあつた。洪庵の、「人のため、道のため」というマインドセットを、混迷の現代を強く生き抜くための指針として一人ひとりをもって、社会全体が協力し、混迷の時代を乗り越えていけると思う。高校時代の今は、幅広い基礎力を身につけていく中で、自分ほどの道で人のために尽くせるのか、考え抜いてほしい。きつと必ず、たどりつけるはずだ。

参考文献

『緒方洪庵伝』

緒方 富雄 著

(岩波文庫)

『緒方洪庵と適塾』

梅溪 昇 著

(大阪大学出版会)

『緒方洪庵』

(吉川弘文館) 【289 J1-284】

『二十一世紀に生きる君たちへ』

司馬 遼太郎 著

(朝日出版社)

十代の聖画像 55

みなさんは、今、どんなものに心動かされますか？

音楽、スポーツ、アニメ、映画、芸能人……あるいは、自然や学問、どなたかのお話もあるかもしれないですね。どんなジャンルのものによせよ、好きなものには、やはり、自分の中で心奪われるだけの理由がありますよね！言葉でうまく人に説明できるかどうかは、さておいて……(笑)。

本に限らず、十代の頃に心惹かれたものを今振り返ってみると、どれも、何かしら生きる希望をくれるものだったような気がします。人生は楽しいことばかりではないし、うまくいくことばかりでもないけれど、「わあ、こんなに美しいものに触れることができるのなら、もっと生きていたいな」「こんなに貴い心で生きている人がいるのなら、私もそんなふうになりたいな」と感じるうちに、気づけばそのものや人を好きになっていったことが多かったように思います。

図書館報ですので、「こ」では「読書」というジャンルに絞り、十代の頃に出会って心動かされた、茨木のり子さんの詩と関連する本一冊を、みなさんにご紹介しますね。

まずは、「この失敗にもかわからず」という詩から。(現代文の授業を担当した人には、話したことがあるかもしれませんが)

五月の風について

英語の朗読がきこえてくる

裏の家の大学生の声

ついでに日本語の逐次訳が追いかける

どこかで発表しなければならぬのか

よそゆきの気取った声で

英語と日本語交互に織りなす

その若々しさに

手を休め

聴きたいれば

この失敗にもかわからず……

この失敗にもかわからず……

そこで はたりと 沈黙がきた

どうしたの？ その先は

失恋の痛手がにわかに疼きたしたのか

あるいは深い思索の淵に

突然ひきずり込まれたのか

吹きぬける風に

ふたたび彼の声はのらす

あとはライラックの匂いばかり

原文は知らないが

あとは私が続けよう

その

この失敗にもかわからず

私もまた生きてゆかねばならない

なぜかは知らず

生きている以上 生きものの味方をして

一読するだけで、初夏の爽やかな

陽光とライラックに彩られた薫

風の中、ふわりと視界の開けるよ

うな、心地よく背筋の伸びるよ

うな、清々しい感覚になりますか？

続けて、もう一篇紹介しまし

よう。タイトルは「汲む」。十代

の頃に掛けてもらった言葉の意味

を何度も「汲む」という詩です。

生きる希望につながる言葉

その言葉の部分だけ、引いてみますね。

初々しさが大切な

人に対しても世の中に対しても

人を人とも思わなくなるとき

墮落が始まるのね 落ちてゆくのを

隠さずとも 隠せなくなった人を

何人も見ました

大人になることと「慣れる」こ

とは違う、ということでしょう

か。ちなみに、この詩の後半では、「

生牡蠣のような感受性」という

言葉が出てきます。初めて読んだ

時、「十代の、不恰好で、脆くて、傷つきやすく、剥き出しの感受性を、こんなふうに表示する人がいるのか」と、詩人の言葉選びの鋭さに驚いた覚えがあります。

さて、茨木のり子さんで「感受性」といえば、次の詩！ 「自分

の感受性くらら」。

ばさばさに乾いてゆく心を

ひとのせいにするな

みずから水やりを怠つておいて

気難しくなってきたのを

友人のせいにはするな

しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを

近親のせいにはするな

なにもかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを

暮しのせいにはするな

そもそもが ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を

時代のせいにはするな

わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらら

自分で守れ

ばかものよ

何年経っても、この真摯さに触れる度、ハツと胸を突かれます。厳しい言葉が連ねられていますが、自分の足で立ち、自らの人生を引き受けて生きてゆく矜持が、なんとも美しい詩だとは思いませんか？

最後に、「生きる」ことそのものをテーマにした本で、十代の頃に最も感銘を受けた一冊を紹介しましょう。タイトルに聞き覚えのある人もいないではないでしょうか？ V・E・フランク『それでも人生にイエスという』(フランクの背景については、少し調べるだけで沢山の情報が出てくると思います)。

この本は、「今の自分では変えようのない困難のある中で、いかに生きるか」ということの答えを誠実に求めたものなんです。高校生のみなさんには少し難しい部分もあるかもしれませんが、苦労して読むだけの価値のある本ですから、ぜひ手に取ってもらえたらと思います。今読んでみて難しければ、大学生になってリベンジを(笑)！

悩み多き日々を送っている人は、色んな方の言葉に、耳を澄ませてみてください。生きる希望につながる言葉にふと出会えることも、きっとあるでしょうから。

シリーズ
愛読書を読む 45

『分かりやすい表現の技術』

藤沢 晃治 著

梅田の地下街は非常に迷いやすいところである。梅田ダンジョン、とはよく言ったもの。道の構造は仕方ない。が、許せないのが道案内である。以前は何かと分かりにくかった。何より、「○○へ」という案内はあっても、「ここが○○です」という案内はない。たどり着いたかどうかかわからないのだ。何度目的地を通り過ぎたことか。

本書は、町の看板、説明書などのダメな具体例とその改善例を挙げる。例え話を交えて、分かりやすく説明してくれている。

説明が丁寧なゆえ、冗長さが無いわけでもない。しかし全体が細かく区切られているので、その都度結論が分かる。

ほかにも「分かりやすい説明の技術」「分かりやすい文章の技術」「分かりやすい教え方の技術」と同じテーマを

扱った本がある。

ものを教える仕事でなくても、生徒の皆さんには、課題研究の発表前に読んでもらいたい。

『新しい高校○○の教科書』

この本には物理・化学・生物・地学の4種類がある。本の帯に「検定外教科書」と銘打っている。内容的に何か目新しいものがあるわけでもない。著者が思うように書いているせいだろうか、読みやすい。

後天性思い込み理系症候群

さがある。それは文章の書き方であったり、内容のつながりであったり、あえて白黒で余計な付加情報がなかったり、いろんな要因がある。教科書を執筆している著者もいて、地に足の着いた内容だ。

教科書の内容を別の体裁で読むと、理解が後押しされるのではないだろうか(いずれも北野の図書館にあり)。

『歌う生物学』

本川 達夫 著

本書では、高校から大学基礎程度の生物の内容を著者自らが歌って教えてくれる。見開きの左ページに歌詞と楽譜、右ページに解説が載っている。

著者を知らない人が、この本を読んだら、いや、聴いたら、「とんでもない色物」だと思いかもしれない。しかしこの方は王道の学者である。大学時代に授業で何度か資料

が引用されており、私は著者を数える学者の一人としか思っていないかった。

ある日曜日の朝、音楽番組をたまたま見ていた。フルオーケストラをバックに、著者が誇らしく歌っている。挙句の果てには、素人でさえ聴きほれるバリトンが登場し、高らかに歌い上げるのである。私はすぐにこの本を購入し、以後、たびたび授業で使うよ

うになった。解説もきちんと押さえてくれているので、決してネタだけの一冊ではない。時にはこういう方向性からも、理解が後押しされるのでは? なお、CD3枚、総勢70曲である。私のお勧めは「ATPの歌」である。授業で聴かされた犠牲者たちは数知れず:。

『電磁気学 初めて学ぶ人のために』

砂川 重信 著

普通、物理の勉強といったら、力学からである。もちろん数学も欠かせない。しかし、分かっているからといって、できるようになるわけではない。学生時代は氣遣ってくれた先生がいたり、超優秀な先輩に「何を言っているのかかわらん」と言わしめる先生がいたり、退屈させてくれない環境だった。

力学が終わった(たことになつ)て、電磁気学に変わったとき、この本を紹介してもらった。内容が新しくなるのいい機会と思ひ読み始めた。初學者向け

だけあって、電磁気学どころか、数学までも最初から解説してくれている。非常に丁寧な内容は、劣等感塗れの私にはありがたかった。微分積分がこんなにも便利なものだなんて。中学で習うVIRが、これほどまでに奥深いものだったなんて。次々に知的興奮が沸いてくる。時折現れる、高校の教科書チックな例題がまた理解を試してくれる。力学をあんまりポカンとしていた時間があったくない。もう一度勉強しなおしたいほどだった。その後熱力学や量子力学の授業はやっぱりさっぱりだったものの、少なくとも先生が何を教えようとして、自分が何を学ぼうとしているか、勉強している気分にはなれていたと思う。そこでちゃんと腰を据えて勉強を始めていけば、という後悔が今も続いている。

良書に巡り合えても、自分の意識が一番大事なのかもしれない。

砂川重信『電磁気学 新装版』

『電磁気学演習 新装版』
【20B14-1】 【20B14-5】

小 熊 英二 著

『社会を変えるには』【304091】

(講談社現代新書)

私は、小学生のころから世の中のことには関心のあるほうでした。でも、社会科の教師になつてからは、目の前のことにとらわれることが多くなり、いまひとつ日本がどのような国なの

読 書 案 内

かがわからなくなつていました。社会科の教師なのに、ダメですね。さて、この本は『民主と愛国』などで、日本の近代を今ままでにない視点で切り取つた著者の二〇一二年の労作です。タイトルのようなテーマ

ももちろんですが、前半部分で、日本社会の現状であるポスト工業化社会とそこに至つた経緯、原子力発電に現れる日本政治の問題点がコンパクトながらしつかりと書かれています。ここだけでも十分に読む価値があるのですが、さらに後半では民主主義とは何か、ヨーロッパの近代

性とは何かが、ヨーロッパの思想史でんこ盛りで語られていま

す。これまでみられたヨーロッパの考え方を直輸入で日本に当てはめようとした説明では、わかりにくかつた事柄が、すつきりと整理されています。おかげで私もずいぶんとわからせてもらえました。そして、授業でも役に立たせてもらえました。

このような本が新書で、高校生にも簡単に手に取れる時代はいい時代だなどおもいます。まあ、安くていい物が手に入る時代こそが著者の言う「ポスト工業化社会」なのでしょうけど。

なお、新書なのに五〇〇ページ以上あるこの本が読み切れないと思う方は、同じ著者のイーストプレスの『日本という国』【081Y1-6】もおすすめです。

中 沢 けい 著

『楽隊のうさぎ』【13NA】

(新潮社)

皆さんは読書が好きですか？私は、恥ずかしながらそこで首

を縦に振ることはできません。あまり得意でないことをやるときは取り掛かりが遅い私ですが、モチベーションを上げるために自分の興味のある分野とリンクさせたり、何かのきっかけを作るようにしています。そこで出会つたのが『楽隊のうさぎ』です。

この小説は中学生になつた主人公の克久がひよんなことから吹奏楽部に入部し、仲間とともにコンクールの全国大会を目指すという話です。中学・高校・大学と吹奏楽を続けてきた私にとつては、共感できる内容が多く、自分の学生時代を思い出しながら読むことができました。

コンクールは課題曲と自由曲合わせて12分。その12分のために部員は何ヶ月もかけて練習を行います。私の所属していた吹奏楽部では、全国大会を目指すほどの実力はありませんでしたが、自分たちのできる最高の12分間を目指して毎日毎日朝から晩まで吹奏楽漬けの日々を送っていたこと、そしてその濃い時間を一緒に過ごしてきた仲間がいることは、今の私に大きな影

響を与えています。

吹奏楽に限らず、ある目標を目指して一生懸命に頑張つてきた経験というのは必ずどこかの場面で活かすことができると思います。今年は、コロナウイルスの影響で大会などが中止となり苦しい思いをした人もいます。ですが、それまでの努力は決して無駄になりません。

ぜひ、この一冊を手にとつて、目標に向かって頑張つている自分と重ね合わせて読んでみてください。

和 田 竜 著

『村上海賊の娘』【13W73-1】

(新潮社)

時代は戦国。織田信長に攻められる大坂本願寺。主人公は村上水軍の娘、景。第一次木津川合戦の史実に基づき、生き活きと描かれた登場人物に魅了された。教科書では、ニコリともしなかつた人物が、一人の人間として認識できたような気がした。

和田竜の著書を一通り読み、ますます歴史に興味を持った。

『のぼうの城』【13W71】は、映画化もされ、タイトルくらいは聞いたことがあるのではないだろうか。他の著者の本を読み、同じ合戦を描いていても、視点が違えば、違うドラマが見えることに気づいた。現地を訪れたという強い衝動に駆られた。

現在の私の趣味は、城巡り。日本城郭協会『日本100名城に行こう』という、公式スタンプ帳を持ち、各都道府県に最低一つは登録されている城の全制覇を目標んでいる。

人生、どんなきつかけで、何に興味をもつかは分からない。私にとつて、それが一冊の本であったということ。歴史が嫌いだった昔の自分より、石垣を愛

でる喜びを知った今の自分の方が好きだ。

騙されたと思って、この本を手にとってみるのも、悪くはないのではないだろうか。

Gary Paulsen 著

『HATCHET』【配架予定】

大学生の時、アメリカでの留学中のこと。冬休みの間は当時住んでいた寮から追い出され、仲の良い友人の誘いでホームステイをさせてもらうことになった。家族みんなで一緒に映画を観たり一面雪の銀世界でそり遊びをしたりなど、楽しかった思い出はたくさんあるが、その中で最も印象深く心に残っているのがクリスマスである。

数日前には大きなツリーを部屋に出し、友人とたくさんのおーナメントでツリーを飾り付け、多くの箱が25日の朝にツリーの下に散らばるのを待った。『From SANTA』と書かれた自分の宛てのプレゼントの中にあつた

のが、この本。

実際に読み始めたのは帰国後の梅雨の時期になってからで、電車に乗っている間などに少しずつ読み進めたことを覚えていゝ。洋書ではあるが難しい語句や表現は多くない。

不時着陸した13歳の少年が、救出されるまで自然の中を一人で生き延びるといふ物語で、さくさく読みやすい展開である。飛行機はどのようにして不時着陸したのか、一人で過ごしている間に少年はどのような困難に遭遇して、また何を考えていたのか、なぜ題名は『HATCHET』なのか、などいろいろ考えながら読み進めるとより楽しめるのではないかと思う。一人で生きる抜く少年の姿と彼の考えの深さには、フィクションでありながら人間ってたくましいんだなって感じさせられる。
あのクリスマスにはたくさんプレゼントをもらったけれど、読み終えて以来この本が一番のお気に入りである。

白井 恭弘 著

『外国語学習の科学―第二言語習得論とは何か』(807S11)

(岩波書店)

三浦 しをん 著

『舟を編む』(913M805)

(光文社)

●『外国語学習の科学―第二言語習得論とは何か』

なんで英語ってこんなに難しいの？何年も勉強しているのに流暢に英語を話せないのはなぜ？と思ひ、手に取った本です。本書は第一言語習得と第二言語習得はどのように異なるのか、第二言語の効果的な学習方法は、など英語学習者の皆さんには興味深い本だと思ひます。堅い理論や研究だけでなく、英語学習におけるお酒の効用や英語学習に向いている性格についても言及されておもしろく読むことができます。

読書案内

す。

私の研究分野は認知言語学でしたが、研究分野を決めるきっかけになった本の一つです。新書で章ごとにテーマが分かれており、とても読みやすいのもこの本の魅力です。

●『舟を編む』

英語を教えています。私自身まだまだ英語学習者の身です。英語学習は地道な努力の連続です。この本は辞書を作り上げるといふ内容の小説ですが、1冊の辞書を完成させる長い長いプロセス、根気のある作業、諦めず続ける様子が英語学習と似ていると思ひます。

「辞書は、言葉の海を渡る舟だ」
「どうかいい舟を作ってくれ」
「きみたちなら、きつとできる」

この言葉は高校生の皆さんにはもちろん、自分自身にも向けられているように読めます。また小説に登場する人々もユーモアにあふれており、親近感を持って、時には自分

自身を登場する誰かに投影して、読むことができる本です。あまり本を読まない人にとってもきつと楽しんで読める本です。

◆新規登録大募集！

「本の森-北野高校図書館メルマガ」に登録しましょう！

新着やおもしろ本の情報なんかを流してます♪

kitano-hon-join@ml.osaka-c.ed.jp

に空メール送信。QRで読めるよ。→



悲惨と戦う唯一の方法

—カミュ『ペスト』—

特集—コロナ禍を転じて

カミュの作品に出会ったのは、高校1年か2年の時、長期休暇の課題図書だった『異邦人』。太陽のせいでも人を殺す、母親が死んでも、悲しまない。まさに不条理そのもの。「わけわからん！」と、当時の私は、理解しようという努力を投げだしてしまった。しかし、かつて挫折したカミュの作品『ペスト』を手取る気になったのは、現在、世界中で新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、パンデミックが宣言されている、このご時世だからである。日々の感染者数の増減、これによってもたらされる経済的損失など、世間はこのウイルスに関する報道で溢れ、目に見えないウイルスの動向に人々の関心が向いている。しかし、このウイルス情報の陰に隠され、暗躍するさらなる別の不条理とどう向き合うべきか、思いを巡らせることが必要なのではないか。もしかしたら、そう直感したからかもしれない。

この物語は、冒頭、舞台となるオランという町を簡潔に描いている。経済が最優先の、娯楽はあるけれど、文化より物質的な繁栄にしか関心がないような商業都市の乾いた印象は、身近な現代社会を感じさせる。この、現代社会と重なる町で、奇妙な事件が起きることから物語は始まる。

ペストが流行することにより、町が長期にわたってロックダウンする中で、人はどう対応するのか。監禁状態となって、追放された状態、すなわち極限の孤独は、単純な連帯を不可能にする。これは、震災や豪雨の被災地に思いを寄せようとするとき、外から想像する以上に内側に向かっている被災者の内面と、外部の軽薄な同情との相容れない感覚と似ている。人々は、いつまでも続く災禍によって、過去や未来という時間の展望が失われ、過去の記憶も未来への希望もなくなり、ただ現在の絶望の中に埋もれてしまう。『ペスト』は、「絶望に慣れることは絶望そのものよりさらに悪い」と警告する。この言葉は、今の私たちに対するメッセージと受け止めることができる。

読み進むうちに、この物語は、現在のコロナ禍と重ねられるだけでなく、東日本大震災のような天災にも、人間が作り出す戦争にも通じる不条理そのものを表していることがわかる。すなわち人間から自由を奪い、死と苦痛と不幸をもたらすすべてのものの象徴なのである。『ペスト』は私たちに、不条理な社会の中でどう生きるかを問うている。

登場人物が「直接にしる間接にしる、いい理由からにしる悪い理由からにしる、人を死なせたり、死なせることを正当化したりする、一切のものを拒否しようと思ひ出した」と告白する場面がある。ときに人間は、国家や社会の視点から、異論の余地のない〈正義〉を立て、死刑に賛成したり、全体的な心理や「未来の幸福」のためと称して殺人や戦争やテロを行ったりする。人間の行為は、たとえ善意から発しているとしても、結果として悪に結びつくこともあるし、逆もある。しかし、どちらも人間の無知から生じることに変わりはない。あの告白は、無知な人間の傲慢さに対して、警鐘を鳴らしているのではないか。

「ペストと戦う唯一の方法は、誠実さということ」。この言葉は、世界の悲惨の中で、自分にできることを日々誠実に行うということであり、物語に貫かれた、どう生きるかという問いへの答えであり、現在の私たちへの生きたメッセージである。

小説は最後に、「ペストは完全に消滅していない」と、災禍が繰り返されることを予言して閉じられる。しかし、作中に登場する人物が、いずれも本当の悪人ではないせいか、読後感は、思いの外、明るく爽快だった。

北野の図書館が、「子供の読書活動優秀実践校」として、文科大臣から表彰されました！

ほんとうは、四月に東京で表彰式がある予定でした。図書館サポーターみんなで東京まで繰り出して、東京にいるOBもいっしょに表彰式へ！なんて思っていました。が、コロナで式はなしになりました。残念。

これは「北野のみなさん、よく本を読んでいますね！」という表彰です。サポーターや先生も、みんなの図書館、として、図書館を愛していますね！ということなのです。これからも、みんなの図書館をよろしくね。

編集部

